２０２４年０６月２２日 読売東京 夕刊 夕三面 ４版 ０８頁

キューバに「下町ロケット」を

論説委員
吉田 健一

小説家・池井戸潤さんの「下町ロケット」シリーズは、技術力で勝負する中小企業の奮闘を描き、テレビドラマも人気を博した。

国内企業の99％は中小企業で、働き手の約7割を占める。物語に自らを重ねた方もおられよう。技術力に知恵と工夫、そしてフロンティアスピリット。中小企業はまさに日本経済の屋台骨である。

そんな日本の中小企業の経験をカリブ海の社会主義国・キューバが学ぶ動きが出ている。

キューバは、米国による経済封鎖や国営企業中心の硬直化した国家統制経済の影響で、慢性的な経済難にある。ここ数年は抗議デモの発生も伝えられている。

キューバ政府は3年前、経済の浮揚に向けて、私営の中小企業を育成する方針を打ち出した。これまでに2000を超す業種で1万社以上が認可されたという。

だが、企業振興に関するノウハウは乏しく、国際協力機構（JICA）が支援に乗り出した。今月には、当局者や経営者ら12人を招き、日本の中小企業振興策の講義や経営者との意見交換を行った。

足裏を洗うフットブラシなどを製造・販売するサンパック（大阪府）では、青山祐二郎社長との間で、中国との価格競争への対応やネット販売の状況などについて活発な質疑応答が交わされた。

ノウハウや技術の蓄積は一朝一夕には進まない。前途は多難だろうが、キューバ版の「下町ロケット」が評判を呼ぶ日が来るよう、日本は息の長い支援を続けたい。